

工業高校の挑戦 ～高校教育再生への道～

齊藤武雄・田中喜美・依田有弘 編著

工業高校の再編や縮小が全国各地で進行している。政府の進める構造改革の一環として高等学校、特に工業高校の再編・縮小は厳しく、弱体化する傾向にある。工業高校の縮小・再編は地方の緊縮財政の中では教育の質を変えない最良の方策とも言えるが、工業教育の面からするとその実態は規模・内容とも、縮小・希薄化の方向にあり、残念に思う。しかし、我が国は工業技術立国、ものづくり教育の先進国として工業高校における意義やその果たす役割は非常に大きいものとする。工業教育は高校教育の基本としての普通教育と専門教育を調和よく合わせ持ち、産業振興の上からも、職業準備教育の面からも、人間育成の点からも必須とされる教育である。これらのことから、工業教育はその原点に立ち返り、これを認識した上で新たな視点からの改革に取り組む必要がある。工業教育再生の道はここに存在すると言える。

本書は工業教育の歴史や理論を基に、主として工業の教育現場における貴重な実践やその多くの成果が工業教育再生の一助になればと、全国の工業関係の先生方が執筆された。各工業高校で再生の道を開こうとする場合には掲載の実例を参考にし、十分に生かされればと思う。

第Ⅰ部は理論編で工業教育の危機的状況とその原因を取り上げ、これらの検討から工業の新たな展望や創造を示す。理論的根拠は実践する上での根本であり、前提でもある。工業教育の危機的状況は量と質の両方に問題がある。量的な問題では工業高校生が在籍数や全高校生に対するその割合が減少していること、質的な問題

では工業教育の命でもある専門性が希薄化していること、またその両面では技術者や技能者になる生徒が減少している事等である。これらの原因は高校教育が大学進学に有利な普通教育に偏していること、市場原理主義に基づく公教育へのコスト削減が図られていること、技術専門的には基礎・基本（簡易化）の重視が必要以上に進み、教育内容が厳選化されていることである。これらのことから、今後の工業教育では可能な限り市場原理主義を抑制し、現代の技術革新や労働状況の変化に対応できる改善をすること、工業教育の様々な要因による本性的不安定さを動的に捉え直すこと等が必要になる。

本書の中心は第Ⅱ部の実践編であるが、さらに第1篇から第4篇に分けられる。実践編では工業教育の課題や方法等が各分野に渡り、その多様な実践例が具体的に示される。その第1篇では工業教育実践の視点から、学ぶ喜びを知る教材づくりや物との働きかけ関係を有する実習、技術的諸問題に挑む課題研究、地域との連携、工業労働界にふれる就業体験等について報告される。第2篇は学校作りに主眼を置く実践で、日刊の学級通信発行や自主性を育てるクラブ活動、困難を抱える生徒に対する援助活動、進路を見据えた実践等が報告される。これらの報告者は皆、澁刺としてプラス思考を持つ人物のように思う。成功するにはこのような姿勢が一番かもしれない。第3篇では工業教育教師としての生き方や歩み等が、第4篇では工業教育に対する卒業生からの意見や評価が紹介される。

第Ⅲ部ではミニ辞典として、各国の工業教育やグローバルスタンダード、また我が国の工業教育史、教育課題、さらに工業高校周辺としての企業内教育や博物館、あるいはキャリア教育、公的職業資格・検定等が紹介されている。

(学文社、255頁、2,900円)

(埼玉県立浦和工業高校 風間 効)